

2024 年度
全学統一入学試験

国 語

【 注 意 事 項 】

- (1) 試験監督の指示があるまでは、問題冊子を開いてはいけません。
- (2) 解答時間は 60 分です。
- (3) この問題冊子は 20 ページ、問題は【一】から【二】までです。
- (4) 解答用紙は 1 枚です。
- (5) 乱丁・落丁、印刷不鮮明などがある場合、手を挙げて試験監督に申し出なさい。
- (6) 解答用紙には、必ず受験番号・氏名を正確に記入し、受験番号マーク欄にも受験番号を正確にマークしなさい。
- (7) 解答はすべて別紙の解答用紙の所定欄にマークしなさい。
- (8) 試験開始から終了までの間は、試験教室から退出できません。
- (9) 問題冊子および解答用紙は室外に持ち出してはいけません。

【一】次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。なお、設問の都合で本文の段落に①～⑧の番号を付してある。

① 「ルールに従う」というのはそもそもどういうことだろうか。鳥が群れになって飛ぶ時のように、周囲の動きと同期化して行動したり、猿の群れがボス猿に威嚇されて従っているのと同じような、物理的・生理的現象にすぎないのか。それとも、理性的に思考し行動する存在である人間ならではの、もっと積極的な意味があるのだろうか。

② 哲学的には大きく分けて二つの見方が可能だろう。一つは、「ルールに従う」と言えるような、特殊な行為類型があるわけではなく、単に制裁を恐れて、あるいは報酬を求めてある行為を控えたり、実行したりしているだけだ、というものである。無論、その場限りで制裁や報酬を加える誰かの指示に従っているだけなら、「ルール」——英語の <rule> やそれに対応する西欧の諸言語の単語には「規則性」という意味もある——に従っているとは言わない。制裁や報酬の対象になる行為が、誰かの意志あるいは社会的な決まり事として固定しているので、従っている人たちの行為に規則性が生じるのが、「ルール」ということになるだろう。したがって、「ルールに従う」というのは、ペットや家畜が躰けられるのと本質的に違わない、ということになるだろう。

③ 思想的にこうした見方に最も強く傾斜しているのが、功利主義、特にベンサム(注1)の教えに忠実な——ルールに従うこと(テ)のキケツではなく、各行為の直接のキケツを重視する——行為功利主義(A)の系譜だろう。ベンサム流の功利主義においては、人間は快楽を求め、苦痛を避けようとする

存在であり、個別の行為や政策の良し悪しは、それが人々の様々な快楽の総和としての幸福を増やすか、それとも、苦痛の総体としての不幸を増やすかによって決まる。

④ 世の中には、犯罪・非行行為で他人に危害を加えることで、快楽を得ようとする体質の人間もいる。放っておくと社会全体の幸福が低下する。ベンサムはそういう人たちをキョウセイ(イ)するための刑罰などの政治的サンクション(注2)——ベンサムは <sanction> の本来の意味に立ち返って、制裁だけでなく、その行為を推奨するための報酬も含む意味で使っている——が与えられていることを指摘する。この見方の下では、人がルールに従うのは、サンクションがうまく機能しているということにすぎない。パノプティコン(注3)は、最小限の費用で刑務所を運営するとともに、囚人が直接身体的な罰を受けなくても逸脱行為を取らなくなるよう、サンクションを合理化する試みである。

⑤ 現代の功利主義者が、人間が意識しないまま「ルール」に従うように誘導する「アーキテクチャ(注4)」を推奨するのは十分うなずけることである。ベンサム流の功利主義では、各自が「ルール」を認識して意識的に従っているかどうかはあまりこだわりの必要のない問題である。結果的に秩序が保てればいいからである。SFの設定でよくあるように、意識自体を完全にコントロールできる技術が開発されれば、「ルールに従うよう強制されている」という苦痛がないどころか、快感を与えることさえできるかもしれない。

⑥ これに対して、「ルールに従う」ことには、刺激(i)に反応しての規則的行動という以上の意味があり、少なくともその意味を理解して——た

とえそれで自分が損をしても——自発的に従おうとする人は存在する、と見ることもできる。これは人間を、他の動物とは違って自分の欲求通りに行動するか、それを差し控えるかを自らの意志で決めることのできる、自由な存在と見る見方でもある。

⑦ この見方は、「ルール」の起源に関して二通りに分かれる。一つは、慣習に従うルーティンの行動パターンから次第に「ルール」が生成し、最初は無自覚的に従っていたのが、次第に言語によって「ルール」を捉えるようになり、意識的に従うようになる、という見方である。もう一つは、人間は理性を働かせることによって、自分が従うべき「ルール」を発見し、自分の意志でそれに従うことができる、という見方である。

近代において前者の見方を代表するのは、イギリス経験論の哲学者で、自我は知覚の束であると主張したヒューム^(注5)(一七一―一七六)である。後者の見方を代表するのは、自由の本質は自律、つまり自己を律する能力であると見たカント(一七二四―一八〇四)である。

⑧ ヒュームも功利主義者と同様に、人間の行動の根源的な動機は、快楽を求め、苦痛を回避する情念にあると見るが、肉体的に脆弱な人間は他の動物と違って、社会の中で他者と協力しないと生きていくのが困難であることにも着目する。社会の中で生きる時、自分だけの幸福のために行動すると、他者とシ^ウョウトツし、協力を得られなくなり、かえって苦痛を受けることになる。各自が他人の支配下にあるものには手を出さないよう、それぞれの振る舞いを規制することが、全体の共通の利益になることを、経験を通して徐々に気づくようになる。そうした振る舞いの規制に際しては、はっきりと言語によって約束する必要はない。はっ

きりした約束(Promise)がなくても、人々の間にある種の取り決め(Convention)が成立していると見ることができる。これは、一艘のボートを漕いでいる二人の人がいちいち声に出して取り決めをしなくても、お互いの体の動きを徐々に調整し、うまく協力できるようになるのと同じようなものである。

⑨ こうして、他人が保有しているもの(Possession)を侵害しないという黙約(Convention)が成立し、各人が保有しているものの範囲が確定するようになると、それを基準に、どういう行為が正しく(＝正義)、何が正しくない(＝不正)か、といった観念が生じてくる。こうした黙約による原初的なルールに基づいて、「所有Property」「権利Right」「責務obligation」といった、より抽象的な観念が生じてくるという。

これらの観念は、お互いの目の前にその事物がなくても、どちらかがそれを実効的に保有していなくても通用する。黙約に即した^(注6)自他の行為に伴うプラスの情念と、それに反する行為から生じるマイナスの情念の働^(エ)きによって、そうした抽象的観念のリンクが徐々に形成される。「所有」「権利」「義務」といった抽象的な観念から、「正しい／正しくない」という具体的な道徳感覚が生じるわけではない。

⑩ これらの観念に従っての日常実践から、誰の所有物か決定するための諸規則(Rules)、同意によって所有を移転する際の諸規則、約束を実行するという規則が形成される(＝三つの基本的な自然法)。さらに、所有や正義を保持する仕組みとしての政府とそれに対する忠誠(allegiance)、国家間の正義に関する諸国民の法(laws of nations)、夫婦を中心に家族を守っていくための特殊な責務としての貞節

(chastity) と慎み (modesty) などとも生じてくる、という。

⑪ これらの諸観念や規則は、それに従った／反した際に生じる快苦の情念によって支えられているが、各人はこのルールに従って（反して）このように行為したらどれだけの快（苦）が得られるか（いちいち）利益を計算しているわけではさえない。功利主義の一種であるルール功利主義は、功利性のあるルールには従うべきと論じるが、ルールは黙約に基づいて形成されると考えるヒュームの道徳論には、「べき」の入る余地はない。社会の中にルールが定着し、それに従って行為することが当たり前になっているため、ルールに従う（反する）こと自体が快苦の原因になっているのである。

⑫ このように、原初的な経験の積み重ねと共有によって抽象的なルールの複合的な体系へと発展していく、という想定に基づくヒュームの道徳哲学は、社会科学における人間行動の分析に通じており、人間の必ずしも意識化されていない行為の意味を問う現代の哲学的な議論でしばしば参照される。ヒュームの黙約論は、社会や国家、正義の起源は自由な主体たちの自発的な合意に基づくとする社会契約論に反対するという見地から構築されているので、現代版の社会契約論であるロールズの正義論を批判する文脈でもしばしば引用される。サンデルの『リベラリズムと正義の限界』（一九八二、九八）や『正義』（邦訳タイトル『これからの正義の話しよう』、二〇一〇）も、ロールズ批判の重要な場面でヒュームの議論を参照している。

⑬ ルールの起源についてのもう一つの見方を代表するのはカントである。経験の中でのルールの生成に注目するヒュームに対して、カントは、

私たちの理性は（幾何学の公理を発見するように）道徳法則を発見することができ、それに従う意志を自発的に形成することができる、という前提で考える。有名な「汝の意志の格率^{注8)}が普遍的立法の原理として妥当するよう行為せよ」という定言命法の定式は、カントのルール観を凝縮して表現したものである。

⑭ 「〜したいのであれば、〜せよ」と条件つきで自らに命令する仮言命法は、その条件次第でいろいろ変化する。例えば「貧乏したくなければ、一生懸命働け」という命題であれば、親の遺産などで貧乏になる可能性が極めて低いのであればほとんど意味をなさないし、貧乏と感ずるのがどういふ状態であるかは、その人の年齢や居住環境、人間関係によって変化する。

⑮ 私たちが道徳的判断だと思っているもののほとんどは、仮言命法によっている。「困っている人を助けなさい」というような、一見定言命法に見えるものでも、「他人から嫌われたくなかったら」とか「社会的名声を得たければ」といった条件が隠れていることが多い。「人目につかないところで、困っている人を助けなさい」でも、「それによって自分がいい人であるという自信を得たいなら」というような条件が意識化されない動機として潜んでいるかもしれない。慣習^{注9)}が条件となって、ある行動を取っているだけかもしれない——慣習によって成立するヒュームのな意味での道徳的行為は、定言命法によるものではないことになる。

⑯ このように考えていくと、純粹な「定言命法」など現実にはないことになるではないか、ということになりそうだが、「仮言命法」が条件に左右されることから逆に考えると、いかなる条件によっても左右され

ることなく、いかなる状況で誰から見ても正しく行為するためのルールだと言えるものは、定言命法である可能性がある、ということになる——十分条件ではないが、必要条件にはなっている。

⑰ だから、定言命法はあのように定式化されるのである。自分の意志を導く格率（基準）が、どんなことがあっても変わらないものであることが、定言命法（普遍的ルール）に従って行為していると言い得る、最低限の条件になる。カント自身は、「嘘をつかない」といったようなものをそのコウホとして考えていたようである。

⑱ 主体が自らの生き方を決定できるという意味での「自律」を自由の本質と見る、ルールズを始めとする現代のリベラルな政治哲学者の多くは、カント主義者を自認する。無論、カントが『実践理性批判』（一七八八）で試みているような、純粋な定言命法の可能性を追求していたら、具体的な政策や制度の話はできない。多くの場合、カントの基準は弛められる。ある主体に自らの行為を選択する意志と能力があれば、その主体はカント的な主体、自らが従うべき道徳原理を見出し、自発的に従うことのできる主体と見なされる。

（仲正昌樹『現代哲学の論点』による）

（注1） ペンサム——イギリスの法学者（一七四八〜一八三二）。

（注2） サンクション——社会的制裁。

（注3） パノプティコン——ペンサムが考案した、中央に看守のいる高い塔を置き、それを取り巻くように監房を持つ円形の刑務施設。

（注4） アーキテクチャ——構造、構成、組織。

（注5） イギリス経験論——十七、八世紀のイギリスで興隆した、知識の源泉は感覚的経験にあるとする哲学上の立場。

（注6） ロールズ——アメリカの政治学者（一九二一〜二〇〇二）。

（注7） サンデル——アメリカの哲学者（一九五三〜）。

（注8） 格率——たんに主観的な行為の原則。

* 問題作成の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、各群の①～

⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は

5

(エ) リンカク

(ア) キケツ

- ① 飛行機のキドウを目で追う
- ② 難しい作戦をキトする
- ③ それはキチの事実だ
- ④ 神社で合格をキネンする
- ⑤ 自宅へのキロ、寄り道する

1

(オ) コウホ

- ① 業界のチカク変動
- ② ナイカクの大任を任命する
- ③ 事件のカクシンに迫る
- ④ ジョウカクの中に攻め込む
- ⑤ クカクを整理する

4

(イ) キョウセイ

- ① 経済キョウコウに備える
- ② キキョウな振る舞い
- ③ キョウジユンの意を表す
- ④ カンキョウがわく
- ⑤ 恩恵をキョウジュする

2

(ウ) ショウトツ

- ① ショウドウに駆られる
- ② カンショウに浸る
- ③ イシヨウを凝らす
- ④ キシヨウ転結を意識する
- ⑤ 権力をショウアクする

3

5

問2 傍線部 (i) ～ (v) の本文中における意味としてもっとも適切

なものを、各群の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答

番号は ～ 。

(i) 「刺激」

- ① 退屈を払拭するもの
- ② 攻撃がもたらすもの
- ③ 痛覚に作用するもの
- ④ 意欲を鼓舞するもの
- ⑤ 生体に作用するもの

(ii) 「即した」

- ① 決められた基準に従った
- ② 間を置かずに連続した
- ③ 思い悩まずに決断された
- ④ 変わらずに適合した
- ⑤ 念頭に置きつつ生成された

(iii) 「妥当する」

- ① 恐縮せずに自信を持つ
- ② 適切に当てはまる
- ③ 釣り合いが取れている
- ④ 譲歩して解決する
- ⑤ 要素ごとに対応する

(iv) 「惰性」

- ① 間違いと知りつつやってしまう行為
- ② 誰の目にも怠慢さが読み取れる行為
- ③ 今まで継続的に行われてきた行為
- ④ 落ちぶれた人間による乱れた行為
- ⑤ 合理的に物事を進めるための行為

(v) 「弛められる」

- ① 決まり事が緩和される
- ② 一定の期間棚に上げられる
- ③ より広範囲に適用される
- ④ 本来の規則が厳格化される
- ⑤ 様々な所で引き合いに出される

問3 傍線部A「行為功利主義」とあるが、これはどのようなものか。

その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 11。

- ① 人間はその場限りで制裁や報酬を加える他者の指示に従って行動を控えたり実行したりするため、ペットや家畜と同様に継続的なしつけが重要であるという考え方。
- ② 人間は理性を働かせて自らの意志で行動を決定することができるため、統治者は人々がルールを認識して意識的に従うように導くべきだという考え方。
- ③ 人間は常に道理にかなった行動を最優先するという傾向を応用し、適切な刑罰を用意することで、犯罪行為の予防や犯罪者のキョウセイが可能だという考え方。
- ④ 人間には快楽を追求し、苦痛から逃避しようとする普遍的性質があるため、この性質を利用しながら人間に賞罰を施すことで秩序を保つことができるという考え方。
- ⑤ 人間が意識的にルールに従っているかどうかはあまりこだわることのない問題であり、報酬や刑罰の有無に関わらず結果として秩序が保たれていればよいとする考え方。

問4 傍線部B「自由の本質は自律、つまり自己を律する能力である」とあるが、これはどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号

は 12。

- ① 自由の本質は、自己の行動指針を揺さぶる報酬や刑罰などの諸要因に錯乱させられることなく、常に条件に適合した行動を選択することができる姿勢にある、ということ。
- ② 自由の本質は、意識されていようがいまいが行動を規制するあらゆる条件に左右されることなく、主体が自らの行動を決定することができることにあり、ということ。
- ③ 自由の本質は、「所有」や「権利」といった抽象的な観念を「正しい／正しくない」という具体的な道徳感覚に変換し、自己の確固たる意志で判断する能力にある、ということ。
- ④ 自由の本質は、言語を通じて意識化されたルールを経由せず、経験を通して徐々に形成された黙約のみに従って行動する、快苦を伴わない状態にある、ということ。
- ⑤ 自由の本質は、万人にとって普遍的な抽象的観念に固執せず、自らが従うべき道徳原理を見出し、自発的に従うことができる条件を意識することにある、ということ。

問5 傍線部C「原初的な経験の積み重ねと共有によって抽象的なルールの複合的な体系へと発展していく」とあるが、これはどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 人間が言語を有する以前から共同体の存続のための行動規範は存在しており、それらが後に言語化を経て徐々に公的な規則として体系化されていくということ。
- ② 共同体の各成員が、自己よりも共同体の利益を優先すべきだということ、将来的な快苦の総量を計算することで認識し、暗黙のうちに体系的な規則が形成されていくということ。
- ③ 共同体全体の利益のためには利己的な行動の規制が必要だということ、経験の蓄積を通して成員の間で言外に認識され、漸進的に規則として体系化されていくということ。
- ④ 原始社会における共同体維持のための取り決めだったものが、社会の文明化とともに徐々に抽象化していき、規則として整備されていくということ。
- ⑤ 積極的に吟味することもなく遵守されてきた共同体の規則が、徐々に言語を用いずとも人々の間に浸透し、不文律ならではの複雑なルールとして定着していくということ。

問6 傍線部D「純粋な『定言命法』など現実にはないことになるではないか」とあるが、なぜこのように考えられるのか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 自らの行為を選択する意志と能力を持ち、自らが従うべき道徳原理を見出し、自発的に従うことのできるカント的な主体を有する人間でも、何らかの条件に束縛されているから。
- ② 一切の動機を必要としないと思われている道徳的行為でも、必ず他者に感謝されたい、他者からの好印象を得たいといった個人的な欲求が動機となって行われているから。
- ③ 現在、条件つきで自らに命じる「仮言命法」はあらゆる人間の行動原理となっており、カントが生存した時代の純粋な「定言命法」で行動する人間は希少な存在となってしまったから。
- ④ 一般に「定言命法」と呼ばれる、いかなる条件によっても左右されることなく、いかなる状況で誰から見ても正しく行為するためのルールなど、現実には存在し得ないから。
- ⑤ 一見無条件に行われているように見える道徳的行為でも、大抵は何らかの条件に裏付けられたものであり、一切の条件を前提としない行為を特定することは困難だから。

問7 この文章の構造に関する説明としてもっとも適切なものを、次の

①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

① ①から⑤段落は、「ルールに従う」という本文全体のテーマを提示し、テーマに関連する二つの見方の概要を紹介する、文章全体の導入の役割を担っている。

② ⑥段落は、人間が「ルール」に従うあり方に関して前段落までの解釈とは異なるものを紹介し、これをさらに分類することで議論の精緻化を図る⑦段落への展開を導いている。

③ ⑧段落のボートの具体例には、前後に記述されているヒュームの道徳論が反映されており、複数の感覚器官を駆使した非言語的コミュニケーションの重要性を立証している。

④ ⑬から⑰段落では、「定言命法」と呼ばれるカントが理想視した道徳原理が紹介され、同時にその非現実性に関して懐疑的な立場からの議論が加えられている。

⑤ ⑱段落では、ここまで扱われてきたカントの道徳論の総括に加えて、新たにロールズの道徳論を紹介することによって、多様な道徳論を扱った幅広い議論を演出している。

問8 次のa～eの中で、本文の内容に合致するものには①を、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は

～ 。

a ベンサム流の功利主義においては、政治的サンクションを合理的に駆使することによって、快楽を求め苦痛を避けようとする人間本来の性質をより促進させることができると想定されている。

b 「～したいのであれば、～せよ」と条件つきで自らに命令する仮言命法は、対象となる者の年齢や居住環境、人間関係によって様々に意味が変化するため、普遍的な道徳原理とはなり得ない。

c ロールズの正義論は、人間の功利性を前提としたヒュームの道徳哲学に反するものであり、主体の自発的な合意を強調するロールズの議論はしばしばヒュームを引用しながら論者たちに批判されてきた。

d S Fの設定に見られるような、人間の意識を完全に制御する技術による統治は、人間の自律性を最重要視するカント主義者たちの思想とは相いれないものであり、現在もカント主義者の批判的となっている。

e 慣習に従うことによるルール遵守や道徳的行為は、行為者の利益や快楽を目的としたものではなく、何らのよこしまな思考も介入しないため、カントが追及した「定言命法」が実現されている。

【二】次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。なお、設問の都合で本文の段落に①～⑬の番号を付してある。

① ^(注) ベーコンの言葉としてよく知られた「知は力なり^A」という言葉にはさまざまな意味が含まれており、理解するのは必ずしも容易ではない。そのために、歴史的にもさまざまに解釈され、キヨ褒貶相半ばするほどである。ここでは、ごく基本的な論点に絞って考えてみたい。まずは主著の『ノヴム・オルガヌム』のなかのもっとも有名な以下の文章をご覧ください。

「人間の知識と力とは合一する。原因が知られなければ、結果は生ぜられないからである。というのは、自然は服従することによってでなければ、征服されないのであって、自然の考察において原因と認められるものが、作業においては規則の役目をするからである。」

② ここでは、まず知識と力は一致するというテーゼが述べられ、続いてその理由があげられている。第一に、世界のなかに新たな状態を実現しようとする場合、^(注) 闇雲に目標に向かって世界に介入したのではうまく目標を実現できるかどうかは分からない。目標を確実に実現するために、目標の状態を結果としてもたらす原因を特定することが重要であり、そのうえで原因となる出来事を引き起こすことが必要である。つまり、世界のなかに普遍的に成立している原因と結果の関係を成り立たせてい

る法則連関を知らねばならない。このような内容を、「自然は服従することによってでなければ、征服されない」と述べている。換言すれば、自然をうまく利用し支配しようとするには、自然のあり方を無視せず、むしろそのあり方を利用しなければならぬ、というわけである。

③ しかし、このようなベーコンの知識観のどこに多くのひとに影響を与えた新しさがあつたのだろうか。これだけだと、相手を支配するためには相手のことをよく知らねばならない、といった誰でもが聞いたことのある世間知か、あるいは、正しい理論的知識を得ることによってはじめて、その知識を応用して役立つ技術を開発できる、といったよく知られた技術の応用科学説とどこが違うのかはつきりしない。

④ このような疑問に答えるには、ベーコンが「成果をもたらす実験」と対比して「^B光をもたらす実験」について述べていることが参考になる。ベーコンは、古代ギリシャで最も高く評価されていた学問的な知識は子どもの知識であり、何も生むことができないと批判し、むしろ、職人たちが蓄えてきた有用な知識の重要性を強調している。しかし他方で、伝統的な職人の知識は、たしかに役には立つが、なぜ役立つのかが明らかになつていない点で不十分だとみなす。職人たちは経験にもとづいて有用な方法を身につけてはいるが、それらは個々ばらばらな盲目的な知識に留まつており、普遍的に利用可能になつていないというわけである。この点をカイゼン^(注)するための方法が「光をもたらす実験」であり、この実験については繰り返し以下のように述べられる。「経験を正しく進め、それによって新しい成果をあげるためには、神の知恵とその定めた順序をそのまま模範としなければならない。ところで、神は創造の第一日に

ただ光だけをつくって、それにまる一日をあて、その日には何も物質的なものをつくらなかった。それと同じように、どんな種類の経験からも、まず第一に、原因と真の一般的命題との発見を誘い出し、そして成果をもたらず実験を求めずに、光をもたらず実験を求めなければならない。

⑤ このようなベーコンの言葉を聞くと、すぐに思いつくのは、経験を解釈する理論的仮説の役割かもしれない。ポパーをはじめとする科学哲学者は、実験で得られる経験的データから新たな知識を獲得するために、経験に先立って、それらを理論の光によって解釈できるようにしておかねばならないことを強調してきた。したがって、「光をもたらず実験」においては理論の役割が強調されていると考えるのはごく自然であろう。実際、新しい知識の獲得に関して、ベーコンは経験の収集のみに固執する経験論の見方を蟻にたとえて批判している。しかし他方で、合理論のように、経験は人間の知性にもとづいた理論の光のもとで解釈されねばならないことを強調する見方も、自らの理論に都合のよい経験のみを取り上げ、反証例があっても、それを無視してしまうという独断的傾向をもつ点で、やはり批判している。ベーコンのいうところのキノウ法は、たんに理論のレベルに属する論理ではなく、自然自身に備わる法則性と自然を利用するための作業の規則の両者を同時にもたらずような論理なのである。つまり、ベーコンにとって「光をもたらず実験」によって取り出されるのは、最初から自然を利用する作業の規則となるような法則性であり、実践と切り離れたたんなる理論的知識と考えられているわけではない。したがってここでは、科学と技術のあいだに応用と呼ばれる仕方結びつけられる必要のあるギャップが存在しているよ

うには思われない。別の箇所では、「作業においてもっとも有用な指示は認識においてもっとも真なる指示である」という言い方までしている。したがって、ベーコンの自然哲学、つまり自然科学観のなかには、なぜ自然の探究に価値があるのか、あるいはそもそも、科学は自然に関して知るに値する知識をもたらずのだろうか、といった疑問の入る余地は最初からないようにできている。

⑥ 明らかにここでは、アリストテレスが認めたような、理論知（エピステーメー）と製作知（テクネー）との区別は解消されているようにみえる。なぜこのような見方ができるのだろうか。以下ではベーコンから少し離れた知見をも利用しながら考えていくことにしたい。

⑦ ベーコンは、『学問の進歩』のなかで、自然の歴史を三種類に分けている。すなわち、正常な自然の歴史（被造物の歴史）と、異常な自然の歴史（驚異の歴史ともいわれ、迷信や作り話などと区別がつかず役に立たないとみなされる）と、人工によって変えられた自然の歴史（技術の歴史）である。そして最後の技術の歴史を自然哲学（いま風にいえば自然科学）のためにもっとも重要なものとみなし、その理由を以下のよ

うに述べている。

「というのは、技術の歴史は、個々別々の技術の経験がただひとりの頭脳によってまとめ考察されるとき、技術と技術との観察をたがいに結びあわせ、たがいに利用しあえるようにすることによって、さしあたって、どんなことについても、うまいやりかたを数多く提供して示唆するだけでなく、なおそのうえに、原因と一般的命題に

関して、これまでに得られたのよりも真実ほんものの知識を与えるからである。というのは、あるひとの氣質は、怒らせてみなければよくわからず、また、プロテウス〔変幻自在の姿と予言の力をもつ海神〕は、キユウチにおいこんでしつかり捕えなければその姿を変えないように、自然の過程や変化も、自由きままにさせておいたのでは、技術によって苦しめ悩ますときほどには、十分にあきらかにはないからである。〕

⑧ ベーコンによれば、アリストテレスは、生物学にみられるギョウセキが示すように、大変優れた学者であるが、その学問は第一の意味での自然の歴史にのみとづいており、第三の技術の歴史をまったく考慮していない点で、自然哲学としては不十分である。その理由としてあげられているのが、前述の引用で述べられているように、自然の真の姿を明らかにするためには、自然に介入して人工的な状況を作る必要があるという点である。

⑨ 実際、ある出来事が生じた場合、その原因を特定するには、多様な要因のなかから、たんなる付随現象や偶然的な相関的な出来事を排除して、実際に働いている要因を取り出す必要がある。そのためには、人工的な状況を作り上げて、条件を制御しながら実験を繰り返し必要があるだろう。「光をもたらず実験」を実現するためには、アリストテレスのように自然の「観想」に留まっていたのでは不十分であり、むしろ、自然を操作し人工的な状況を作り上げる製作活動が不可欠だということになる。ここでは、アリストテレス的な理論知と製作知の区別の解消のみならず、

むしろ逆転が生じているということもできる。自然についての真の姿を知るためにこそ、自然に介入して人工的な状況を製作する技術が必要になるからである。

⑩ 新しい自然哲学の成立、つまり、近代科学の成立の特徴をベーコンの観点からとらえることは、すでにさまざま論者によって強調されてきた。また、近代科学の成立の過程である科学革命を象徴する出来事としてガリレイの落下実験や望遠鏡による天体観察などが取り上げられる場合、そこで見出されるのは、人工的に作られた実験装置や望遠鏡のような観測器具を用いることによって始めて可能になった人工的現象であり、そして、まさに人工的に可能になった現象こそが自然本来のあり方を示しているとみなされるようになった点が注目されてきた。こうした点で、近代科学においては、自然と人工の関係について、アリストテレスの見方の一種の逆転が生じていると考えることもできる。つまり注意深く作られたものこそが真の自然の姿、真の自然の事実なのだ、というわけである。

⑪ しかしながら、ここには明らかに一種の逆説が生じているようにみえる。というのも、真の自然的な事実とは、それが作られていることによって明らかになる、というわけであるから、これはすなわち、作られたものはまさに作られているがゆえに作られていないあり方が示される、ということの意味しているはずだからである。

⑫ この逆説的にみえる事象を解釈する課題には、多くの哲学者が取り組んできた。

⑬ そのひとりとして、たとえばカントをあげることができる。という

のも、近代初頭に現れた実験科学の特徴を一般の認識論の原則にまで仕立て上げたのがカントだったと考えることができるからである。認識が対象に従うのではなく、対象が認識に従う、という「コペルニクスの転回」によって認識論の問題を解明した点にこの特徴が現れている。しかしカントの場合には、認識と対象の関係は主観・客観という二元論的図式のなかでとらえられたため、認識可能な対象は物自体と区別された現象に留まるとみなされ、一種の観念論にとどまっているのではないかという疑念をもたれ続けることになった。

⑭ 現代では、こうした試みとは違った見方のもとで、この問題をとらえなおそうとする試みがなされている。ここでは、アクターネットワーク理論の提唱者のひとりとして知られるブルーノ・ラトゥールの見方を参照しておくことにしたい。

⑮ ラトゥールの見方では、人間は最初から世界のなかに位置づけられており、自然と社会が重なった場所で多様な要素と相互作用しているとみなされる。そしてその相互作用のあり方を形成する要因がすべて一種のアクターとみなされる（人間以外のアクターは非・人間と呼ばれる）。したがって、科学の活動も、こうした相互作用の積み重ねのなかから、特有な仕方でも成立してくるとみなされる。たとえばラトゥールは、パストゥールによる乳酸発酵をめぐる実験を題材にして実験をめぐる逆説的な構造を描いている。

⑯ パストゥールは、一八五七年に、発酵をたんなる化学的過程とみる当時支配的であった見方に対して、乳酸発酵が乳酸に固有の酵母という生命体によるものであることを示す論文を発表した。ラトゥールによる

と、パストゥールがいくつもの実験で試みたのは、新たな人工的な舞台装置を構築することによって、乳酸発酵の酵母という新たなアクターをこの舞台上に登場させることだった。このときにパストゥールが克服しなければならぬ困難は「状況設定がどれほど人工的なものであるうとも、新しい何ものかは、状況設定から独立して出現しなければならぬ」という点にあった。ラトゥールによれば、この逆説的に見える事態の解明に多くの哲学者たちが取り組んできたが、困難を避けられずにきた理由のひとつは、実験をゼロサムゲームとみなし、科学が実験を通して新しいアクターを獲得することによって成長することに注意を払わなかったからだということになる。ただしこのとき、実験によるアクターの製作活動を通常の人工物の製作と同じように考えたのでは理解できない。というのも、実験では、まさに人工的に作り上げられてきたという理由で、あらゆる生産、構築、製作からの完全な自立性を獲得するということが起きているからである。

（村田純一「科学の創造性と倫理——ベーコン的科学的行方」による）
（注）ベーコン——イギリスの哲学者（一五六一—一六二六）。

* 問題作成の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、各群の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は

25。

21

(エ) キユウチ

- ① 難民をキユウサイする
- ② 建物のロウキユウ化が進む
- ③ 事態がフンキユウする
- ④ キユウダイ点をとる
- ⑤ キユウジヨウを訴える

24

(ア) キヨ

- ① キトクに陥る
- ② キロに立たされる
- ③ 責任をホウキする
- ④ 名誉をキソンする
- ⑤ 壁にキレツが生じる

21

(オ) ギヨウセキ

- ① キセキに入る
- ② セキジが上がる
- ③ ルイセキ赤字が増える
- ④ ボウセキ工場を建てる
- ⑤ ジョウセキ通りに打つ

25

(イ) カイゼン

- ① ゼンジ進展しつつある
- ② ミゼンに防ぐ
- ③ ゼンゴ策を講じる
- ④ ハイゼン室に入る
- ⑤ エイゼン係になる

22

(ウ) キノウ

- ① ノウリヨウ花火大会
- ② クノウの色が見える
- ③ ノウベンな政治家
- ④ ノウコンの制服を着る
- ⑤ センノウを解く

23

問2 傍線部 (i) ～ (v) の本文中における意味としてもっとも適切

なものを、各群の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答

番号は

26

 ～

30

。

(i) 「相半ばする」

26

- ① 相手に対して攻撃を加えている状態である
- ② 二つのものが距離を取っている状態である
- ③ お互いが牽制し合っている状態である
- ④ 異質なものが五分五分の状態である
- ⑤ 仲が悪い者が手を携えている状態である

(ii) 「闇雲」

27

- ① 道理に外れた乱暴な振る舞いをする事
- ② 効率的に物事を処理するのを目指す事
- ③ 気持ち先走り人の道にそむく事
- ④ 前後の思慮もないまま物事を行う事
- ⑤ 先を見通すことなく後ばかり見ている事

(iii) 「普遍的」

28

- ① つねに一定の状態をたもっているさま
- ② 当然なすべきこととして捉えられているさま
- ③ いつまでも変わることなく存在しているさま
- ④ 広く深く他のものに影響を与えているさま
- ⑤ あまねくすべてのものにあてはまるさま

(iv) 「固執する」

29

- ① かたくなに守って、曲げようとしない
- ② 正しさを信じ、相手を説得しようとする
- ③ 信念を貫き通し、思いを成就する
- ④ 重要であることを理屈づけようとする
- ⑤ どんなに言われても見向きもせず黙っている

(v) 「気質」

30

- ① その人の人となり分かる、その人の考え方
- ② 生まれながらに持っている、その人の心の持ち方
- ③ 育ちの中で形成されていく、その人の所作
- ④ 表面的にすぐ見て取れる、その人の特徴
- ⑤ 誰にも悟られることのない、その人の性格

問3 傍線部A「知は力なり」とあるが、このように言われるのはなぜか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 31。

- ① 原因と結果を成り立たせる普遍的な法則が自然の中には存在しており、その法則に基づいて自然を考察することによって、自然を理解することが人間の宿命であるから。
- ② 自然をうまく利用して思うような結果をもたらすためには原因が分からなければならず、原因が分かればそれを引き起こして目標の状態を達成することができるから。
- ③ もし人間の思うままに自然を利用し征服することを目指すのなら、何ら人間が手を加えることなく、神によって創られた自然のあり方そのままに用いなければならないから。
- ④ 森羅万象何事においても、物事は原因と結果という因果的法則のもとに生じており、そのような法則を人間がみずからの知を働かせて作り上げる必要があるから。
- ⑤ 世界のなかに新たな状態をもたらそうとするなら、いままでしただっていた世間知や技術の応用科学説とは違った法則連関を導き出さなくてはならないから。

問4 傍線部B「光をもたらす実験」とあるが、これはどのような実験なのか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 32。

- ① 実践と切り離された理論的知識をもたらすものではなく、まず実践つまり経験をできるだけ数多く積み上げ、そこから知性を働かせて理論を取り出す実験。
- ② 作業においてもっとも有用な指示は、認識においても真なる指示であり、その指示に基づいて、経験に頼ることなく論理によってのみ個別の結論を導き出す実験。
- ③ 正しい理論的知識を得た上で、その知識を応用して役立つ技術を開発するものではなく、最初から自然を利用する作業の規則となるような法則性を取り出す実験。
- ④ なぜ自然の探究に価値があるのか、科学は自然に関して知るに値する知識をもたらすのだろうかといった問題に対して、疑問の余地がない答えを導き出すための実験。
- ⑤ 古代ギリシャでもっとも高く評価されている学問的な知識ではなく、また、職人たちが蓄えてきた有用な知識でもなく、経験的データから新たな知識を獲得するための実験。

問5 傍線部C「最後の技術の歴史を自然哲学（いま風にいえば自然科学）のためにもつとも重要なものとみなし」とあるが、なぜそのように見なされるのか。その説明としてもつとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 33。

- ① 個々別々の技術の経験が一人の人間の知性によってまとめて考察されるとき、技術と技術を結合させることによって利用し合える、最大の利点を得ることが出来るから。
- ② 観察することによって自然の中の原因結果の法則性を見出すのではなく、自然とはまったく関係なく、人工的な状況を作り出すことによって、真理が捉えられるから。
- ③ 神の被造物としての正常な自然や、迷信や作り話などと区別がつかず役に立たない異常な自然ではなく、古代ギリシャから伝統的に踏襲されてきた自然であるから。
- ④ たんなる付随現象や偶然的な相関的出来事を排除して、より本質的な現象や必然的な相関的出来事だけにすることによって、より効率的で利用しやすい自然になるから。
- ⑤ 自然についての真の姿を知るためには、自然をたんに眺めているだけではなく、自然に関わることによって、人工的な状況を作り出し自然のあり方を見出す必要があるから。

問6 傍線部D「この逆説的にみえる事象を解釈する課題には、多くの哲学者が取り組んできた」とあるが、哲学者たちはどのような解釈をしているのか。その説明としてもつとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 34。

- ① 自然は人間と人間以外のアクターである非・人間とで作り上げられているが、人工的な状況を構築できるのは、人間だけであると、ブルーノ・ラトウールは解釈している。
- ② 実験科学の特徴を一般の認識論の原則にまで仕立て上げたことにより、自然科学を自然哲学の系譜の中で捉えることができるようになったと、カントは解釈している。
- ③ 人間はそもそも自然と社会が重なった場所で、人間だけではなく多様なアクターと相互に作用を繰り返していると、ブルーノ・ラトウールは解釈している。
- ④ 天動説ではなく地動説が正しいと証明し、認識が対象に従うのではなく、対象が認識に従うと、いままでの考え方を根本的に転回するように、カントは解釈している。
- ⑤ 理論知（エピステーメー）と製作知（テクネー）とを区別するべきであるのに、その区別を解消したために、真の自然的な姿を見失ったとアリストテレスは解釈している。

問7 この文章の構造に関する説明としてもっとも適切なものを、次の

①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

① ①と②段落では、ベーコンの世によく知られた「知は力なり」

について解説を加え、③段落では、そのベーコンの言葉が正しい内容であるのかどうかという問題が提起され、本文の議論が始まっていく。

② ④段落では、③段落で提起された疑問に対するベーコンの答えを説明し、⑤段落では、現代の科学哲学者ポパーや古代ギリシャの哲学者アリストテレスの考えを用いて、その答えの正しさを証明している。

③ ⑦段落では、自然の歴史を、被造物の歴史、驚異の歴史、技術の歴史の三つに分け、そのように分けることが重要であることを、ベーコンの言葉を引用することによって、具体的に説明している。

④ ⑧から⑪段落では、アリストテレスの議論が自然哲学として十分なものであることを述べているだけでなく、アリストテレス的な理論知と製作知の区別の逆転が起こっていることが指摘されている。

⑤ ⑫から⑮段落では、⑧から⑪段落で指摘されたアリストテレスの見方の一種の逆転を、のちの世の哲学者であるカントやラトゥールがどのように批判し反論したのが説明されている。

問8 次のa～eの中で、本文の内容に合致するものには①を、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は

～ 。

a ベーコンは、主著である『ノヴム・オルガヌム』のなかで「人間の知識と力は合一する」と語っていた。しかし、このベーコンの知識観は、陳腐なものであり、多くの人びとに影響を与えるほどの力を持つものではなかった。

b 『学問の進歩』のなかでベーコンは、自然の歴史を、被造物の歴史、驚異の歴史、技術の歴史と三種類に分けて捉え、技術の歴史が自然科学において重要なものであると考えた。それはアリストテレスの自然と人工の関係についての見方を逆転させたものであった。

c ブルーノ・ラトゥールは、アクターネットワーク理論を提唱した哲学者であり、科学の活動は人間と非・人間の相互作用の中から成立してくると考えた。この考えから、ベーコンがなぜ自然の歴史を伝統的に考えられてきたように捉えなかったかを理解できると考えた。

d アリストテレスはエピステーメーとテクネーとを区別していたが、ベーコンは区別していなかったのではなく、アリストテレスは成果をもたらすことばかり考えていると批判していた。このようにベーコンはアリストテレスの哲学を子どもの知識だと捉えていた。

e 新しい自然哲学、つまり近代科学の成立には、ガリレオの落下実験や望遠鏡による天体観察などが重要な役割を果たした。そのような実験や観察は、伝統的に考えられてきた自然の歴史を忠実に踏襲することによって可能になったものである。

40